



日本赤十字社

日本赤十字社広島県支部×カンボジア赤十字社



ユース相互交流事業

スタディーツアー

R7年度 報告書

日本赤十字社広島県支部 事業推進課

菅原 来実

目次

1 事業の概要	2-4
2 渡航前事前研修	5-7
3 カンボジア現地渡航	
活動場所の紹介	9-12
参加学生の学びや気づき	13-25
4 帰国報告会	25
5 全体の振り返りと成果、今後への展望	26
6 その他	27

1 事業の概要

目的

カンボジア赤十字社との共同により異文化交流や各国のボランティア活動を通じて、参加者が国際的な視野をもって広く物事を見聞きし、課題発見能力や解決方法を見出す（考える）力を醸成する。

また、二国間の参加者同士の相互コミュニティを形成することで、自律的な活動となるような仕組みを構築する。

年度別研修場所

年 度	R7	R8	R9	R10	R11
研修場所	カンボジア 広島から派遣	広 島 カンボジア から受け入れ	カンボジア 広島から派遣	広 島 カンボジア から受け入れ	カンボジア 広島から派遣

研修の内容

3つのテーマ（平和、気候変動、災害対応）に沿って活動を行った。

○シェムリアップでの研修

（1）カンボジア赤十字社シェムリアップ支部の事業及び活動を学ぶ

①災害への備え ②公衆衛生教育（コミュニティヘルス）

（2）カンボジア赤十字社ユースのボランティア活動への参加（交通安全や救急法）

（3）Wat Bo School（小学校）、SAMDACH OV High School（高校）での異文化交流

（4）トンレサップ湖の暮らしや社会課題を学ぶ

（5）気候変動アクション（植樹活動への参加）

- (6) カンボジアの歴史・文化・生活を学ぶフィールドワーク（アンコール国立博物館訪問、アンコールワット群の訪問、ホームステイ、古代碑文・手工芸品の見学）
- (7) 軍事衝突の影響により避難民の方々が身を寄せているパゴダ（寺院）の訪問
- プノンペンでの研修
- (8) クメール文化、ポルポト政権下の歴史を学ぶ
- (9) カンボジア・広島ユースフォーラム

訪問の成果及び今後の課題

現地到着後、参加した学生はカンボジア赤十字社ユースとの交流や活動を通じて、文化や生活習慣、価値観の違いに触れながら、相互理解を深めた。言語や環境の違いに戸惑う場面も見られたが、日を追うごとに自ら現地ユースや関係者に声をかけ、意見交換や協働に積極的に取り組む姿が見られるようになった。また、人道支援の現場を実際に訪問し、支援を必要とする人々と向き合った経験は、学生にとって国際社会の課題を自分事として捉える契機となり、赤十字ユースそして将来国際社会で活躍する担い手として求められる役割や姿勢への理解を深める重要な学びとなった。

一方で、学生同士が直接会って交流できる機会以外の期間における継続的な関係づくりについては、今後の課題として挙げられる。オンラインを活用した交流の仕組みづくりや、双方のユースが主体的に関わり続けられるテーマ設定など、工夫が求められる。また、実際に学生を引率して渡航したことで、スケジュールの組み方や食事面を含む生活面のサポートなど、運営面における改善点も明らかとなった。これらの課題については、両赤十字のスタッフが共有し、次回以降、より安全で学びの深いプログラムへと改善を図っていく。

渡航者

○学生

- (1) 広島県立加計高等学校 2年 太田 優帆
- (2) 広島県立叡智学園 1年 吉元 いつは
- (3) 広島県立国泰寺高等学校 2年 高畠 仁
- (4) 広島なぎさ中学・高等学校 2年 園田 佳奈
- (5) 広島県立安芸府中高等学校 3年 平野 花歩
- (6) AICJ 中学・高等学校 2年 大森 悠生
- (7) 英数学館高等学校 2年 王野 朝陽
- (8) 武田高等学校 2年 石井 みわ
- (9) 広島県立叡智学園 1年 小山 陸
- (10) 広島市立舟入高等学校 2年 斎藤 凜
- (11) 日本赤十字広島看護大学 3年 知久 遥
- (12) 日本赤十字広島看護大学 3年 菅 彩華

○職員

- (1) 日本赤十字社広島県支部 事業推進課長（兼）国際事業係長 新谷 孝明
- (2) 日本赤十字社広島県支部 事業推進課 救護係長（兼）講習普及係長 佐藤 藍
- (3) 日本赤十字社広島県支部 事業推進課 主事 菅原 来実



関西国際空港前泊時の宿泊先にて

2 渡航前事前研修

本事業では、学生が現地での活動を主体的かつ安全に行い、学びを深められるよう、渡航前に6回の事前研修を実施した。事前研修では、事業の目的や赤十字活動への理解を深めるとともに、カンボジアの社会・文化的背景を学び、異文化理解と相互交流に向けた基礎的な姿勢を養うことを目的とした。

第1回（2025年5月25日）

参加学生及び帯同職員の自己紹介を行い、参加者間の相互理解を深めた。また、赤十字の基本原則や国際活動の概要について学び、本事業が赤十字活動の一環として実施される意義を確認した。さらに、「カンボジアってどんな国？」をテーマに、広島大学に在籍するカンボジア人留学生による英語での講義を実施し、歴史、文化、社会背景について学んだ。現地の視点から語られる講義を通じて、異文化理解を深めるとともに、英語でのコミュニケーションへの意識向上を図った。



第2回（2025年6月14日）

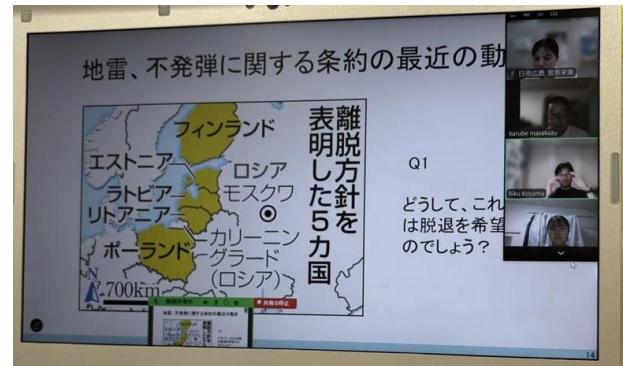
赤十字国際委員会（ICRC）の職員を講師としてお招きし、国際人道法に関するワークショップを実施した。紛争地における実際の活動事例の紹介を交えながら国際人道法の基本的な考え方について学ぶとともに、赤十字の基本理念である「人道」について理解を深めた。研修を通じて、紛争や暴力を遠い出来事として捉えるのではなく、自身の身近な生活と結びつけて考え、「日常の中で平和につながる行動とは何か」について主体的に考える機会となった。



第3回（2025年7月1日）

研修テーマの一つである「平和」への理解を深めることを目的として、日本地雷処理を支援する会（JMAS）理事の軽部真和氏を講師にお招きし、カンボジアにおける地雷処理活動をテーマとした講義を実施した。講義では、内戦終結後もなお地雷が人々の生活や安全に影響を及ぼしている現状や、地雷除去活動の実際について、事例を交えながら紹介いただいた。

参加学生からは、戦争が終結した後も地雷が人々の暮らしを脅かし続けている現実に大きな衝撃を受けたとの声が聞かれた。特に、子どもたちが被害に遭うケースが多い点が強く印象に残ったという意見が寄せられた。学生たちは、地雷除去の困難さや長期的かつ地道な支援の重要性を学ぶとともに、平和の実現に向けて自分自身に何ができるのかを改めて考える機会となった。



第4回（2025年7月20日）

カンボジア渡航中には、気候変動に対する取り組みの一環として植樹活動を予定していることから、本研修では、ひろしま人と樹の会理事の櫻井充弘氏を講師にお招きし、気候変動をテーマとした講義を実施した。講義では、カンボジアに限らず、講師の豊富な海外経験に基づく事例紹介もあり、学生にとって視野を広げる有意義な学びの機会となった。



参加学生からは、「その地域の人々の生活に役立つ樹木を選んで植えることが重要である」という点が特に印象に残ったとの声が聞かれた。樹木は、実を収穫して加工・販売するなど、地域の生計を支える資源となる場合もあり、単に植樹を行うだけでなく、その国や地域の背景や人々の暮らしを理解した上で取り組む必要があることを学んだ、との感想があった。

第5回（2025年9月2日）

第5回事前研修では、「IFRC（国際赤十字・赤新月社連盟）について学ぶ会」と題し、マレーシアにある IFRC アジア大洋州地域事務所に、日本赤十字社本社から出向中の三亀恭子氏を講師にお招きました。研修では、IFRC の役割や現地における赤十字の活動内容、国際現場での業務についてお話を伺った。

学生からは、自身を「赤十字の一員」「ユースとしてのリーダー」として捉える意識がこれまで十分でなかったことに気づかされたとの声が聞かれた。国際的な人道機関である赤十字のもとで活動する責任を自覚し、国内外の課題や困難な状況に置かれた人々に対して、主体的に関わり、発信していく必要性を理解したとの意見があった。また、IFRC が各国の文化や状況を踏まえ、国と国との間に立って調整を行う役割を担っていることへの理解が深まり、支援や活動においては「自分たちの基準」ではなく、「その国・地域にとって本当に必要なものは何か」を考える姿勢の重要性を学んだとの声があった。さらに、年齢に関わらずユースも赤十字のリーダーの一人であるという講師の言葉が印象に残り、高校生であることを理由に遠慮するのではなく、一人のボランティアとして責任と自覚をもって行動していきたい、との前向きな意識の変化が見られた。



第6回（2025年12月5日）

広島県支部職員より、渡航に関する最終的なスケジュール確認を行うとともに、渡航前から渡航中に至るまでの安全管理および健康管理について説明した。参加者全員で内容を再確認したうえで、渡航前最後のブリーフィングを実施した。

3 カンボジア現地渡航（2025年12月15日～23日）

全6回の事前研修を経て、2025年12月に、下記スケジュールでカンボジアへの現地渡航を実施した。現地では、「災害対応・気候変動・平和」をテーマに、現地ユースとの交流をはじめ、意見交換や体験的な学習を通じて、カンボジアの人々の暮らしや社会的背景への理解を深めた。次ページでは、渡航学生による活動内容及び訪問先の紹介に加え、本事業を通じて学生が得た学びや気づきについて報告する。

日付	AM	PM
12/15		広島駅より関西国際空港へ
12/16	日本出国（ハノイ経由）	ハノイを経由し、カンボジア王国到着
12/17	シェムリアップ支部表敬訪問（歓迎の挨拶、メンバー紹介、セキュリティーブリーフィング等）	アンコール国立博物館見学
12/18	避難所訪問 トンレサップ湖訪問	サムタックアハイスクール訪問 (現地生によるクメール舞踊やクメール歌曲の披露、広島ユースの日本文化紹介、交通安全に関する啓発活動への参加等) カンボジアの伝統的な古代碑文の見学
12/19	ワットボーカ学校訪問（広島ユースが日本文化を紹介交流） カンボジア赤十字ミレニアム・パークの見学	アンコールワット訪問
12/20	ユース気候変動アクションに参加 避難所訪問	プノンペンへ移動
12/21	トゥールスレン虐殺博物館訪問	ユースフォーラム
12/22	ロイヤルパレス見学	カンボジア王国 出国
12/23	ハノイを経由し、日本到着 広島へ	

活動場所の紹介

カンボジア赤十字社及びシェムリアップ支部の活動 (小山 陸)

カンボジア赤十字社シェムリアップ支部を訪問し、災害対応に加え、気候変動対応、貧困支援、公衆衛生や教育啓発など、地域社会を支える幅広い人道支援を担う中核機関であることを学んだ。



アンコール国立博物館 (斎藤 凜)

アンコール国立博物館では、ヒンドゥー教と仏教を軸に、カンボジアの歴史や宗教観の変遷を時代順に学んだ。展示を通じて、日本との共通点や相違点を含む文化的な背景への理解を深めた。



トンレサップ湖及び周辺集落 (大森 悠生)

東南アジア最大のトンレサップ湖を訪問し、約 8,000 人が暮らす水上集落を視察した。季節で水位が大きく変動する環境の中、湖と共に生活する人々の暮らしを学んだ。



サムタックアハイスクール（石井 みわ）

サムタック・アハイスクールを訪問し、生徒による歌やダンス、かるた体験を通じた文化交流を行った。また、交通安全プログラムへの参加を通して、地域における安全意識向上の重要性を学んだ。



ワットボーカ学校（高畠 仁）

洪水被害を受けやすく、改修を重ねながら運営されている小学校を訪問した。支援により整備された浄水設備を含む学校環境を学ぶとともに、現地ユースと協力した交流を通じ、国を越えたチームワークを深めた。



アンコールワット（平野 花歩）

世界文化遺産アンコールワットを訪問し、ヒンドゥー教と仏教が融合したクメール王朝の宗教建築と歴史を学んだ。壮麗な景観から、宗教と自然が調和するカンボジア文化への理解を深めた。



ミレニアムパーク（吉元 いつは）

赤十字ユースの植樹により整備されたミレニアムパークを訪問した。洪水や乾季の影響を受けながらも管理が続けられる森林を通じ、環境保全とユースの継続的な関わりの重要性を学んだ。



トゥールスレン博物館（王野 朝陽）

旧クメール・ルージュ政権下で収容所として使用されたトゥールスレン博物館を訪問し多くの命が奪われた歴史を学んだ。展示を通じて、人権と平和の尊さを改めて考える機会となった。



パゴダ（寺院）（園田 佳奈）

軍事衝突を受け、一時的に避難所として使用されている寺院を訪問した。仏教文化のもと寺院が避難所となるカンボジアの特徴や、子どもや障害者を支える医療・支援体制を学んだ。



日本企業支援の学校（太田 優帆）

日本人による寄付で支えられている学校を訪問した。小学校から高校までが同一敷地にあり、年齢混在の学習環境や限られた生活条件の中で、語学などの教育が行われている実態を学んだ。



ロイヤルパレス（石井 みわ）

ロイヤルパレスを見学し、仏教思想と深く結びついた王宮文化や、国王の不可侵性を象徴する空間構成を学んだ。建築や展示から、歴史を受け継ぐ王国としてのカンボジアの姿を理解した。



参加学生の学びや気づき

スタディーツアーを振り返って（太田 優帆）

今回のスタディーツアーで多くの学びを得ることができ、様々な文化の違いに触れながら視野が広がったように感じる。

このスタディーツアーに参加できることができたときはとても嬉しくて楽しみな気持ちであったが、事前研修を重ね渡航の日が近づくにつれて不安な気持ちが大きくなっていた。特にユースフォーラムの準備で英語を使う時に他のメンバーとの英語力の差を感じ、不安に感じた。実際にやってみると空港で出迎えてくれた、カンボジア赤十字社のスタッフの方々や渡航中ずっと一緒に過ごしてくれたカンボジア赤十字社のユースの温かい歓迎や優しさで少し気持ちが軽くなったような気がした。実際、言語の壁を感じた場面もあった。しかし、今まで英語で話しかけられたことに全く反応できていなかったけれどだんだん返せるようになり、成長したと感じる。なかなか言葉が出てこない私のことも待ってくれて、伝えようとする努力も大切だということにも気づくことができた。4月に日本に来てもらう時までにもっと英語でコミュニケーションをとれるように練習したいという目標も出来た。

そして日本とは違う様々なことを感じることができた。特に感じたことは日本の水のありがたさである。水道水が飲めない、歯ブラシで水道水が使えない、という生活をし、日本がどれだけ恵まれているのかを実感した。この日本ではできない経験をしたからこそ、水など資源を大切に使っていかないといけないし、どのように広めるか、普及させていくかも考えていくべき課題だと感じた。

また、避難所、トゥールスレン博物館に行ったことが印象に残っている。タイとの国境で起きていた戦争で避難してきている人たちの避難所を訪問した。私は今まで避難所に行ったことがなく、初めて行った。いつ帰ることができるかわからない避難者の方とふれあい、心が痛んだ。今まで平和について考える機会はあったが、今回実際の現場を見たことで平和は当たり前ではないし、自分たちにできることを考えなければならないことをより実感した。

トゥールスレン博物館では展示されているものがとてもリアルで当時の悲惨な様子が伝わり、胸が締め付けられたような気がした。カンボジア赤十字社ユースたちからもこのような歴史を繰り返してはならないという気持ちが伝わってきて、広島と似ている部分があると感じた。広島の中だけで考えるのではなく、カンボジアのように平和意識を持っている他国の同年代の人たちと広い視野をもって一緒に考えることが大切だと感じた。

この一週間の貴重な経験は自分の財産になった。このスタディーツアーに関わってくださったすべての方に感謝し、この経験と学びを将来に生かしていきたい。また4月に日本が受け入れをする際は今回カンボジア赤十字社のスタッフの方、ユースたちがしてくれたようにおもてなしをして恩返しをしたいと思う。



避難所で感じた感謝と笑顔が生み出す WELL-BEING (吉元 いつは)

私は、避難所訪問を通してカンボジアの方の生き方に強く尊敬し、感動した。その体験を書きたいと思う。

避難所で目にしたのは笑顔や感謝が絶えないカンボジアの方々の姿である。避難所では、厳しい状況に置かれているにもかかわらず、避難している人々にも支援する人々にも、自然な笑顔があふれていた。避難所と聞くと暗く重い雰囲気を想像していた私にとって、その光景は意外であり、同時に強く心に残った。

私たちは避難所で、カンボジア赤十字社のメンバーと一緒に物資支援を行った。その際、私たちが配布を行ったことで、避難している方々を待たせてしまう場面があった。また、その様子を記録するためにカメラも入っていた。もし自分が避難民の立場だったら、苦しい状況の中で待たされることや、多くの人に注目されることに不満を感じてしまうと思う。しかし実際には、避難している方々は私たちに向かって手を合わせ、笑顔で感謝の言葉を伝えてくださった。

その笑顔の理由については、ユースの子が避難民と話をしている中で知ることができた。その答えは「感謝の気持ち」であった。避難所までバイクで丸二日かかる道の途中でバイクが壊れた際に、近くの民家の人人が助けてくれたことや、避難所へ向かう途中で多くの人から食べ物や物資を分けてもらったことなど、避難所にいる人々は、困難な状況の中でも周囲の人々への感謝を大切にして生活していた。その姿に、私は強い驚きを覚えた。

また、その感謝の気持ちは、支援する側の姿勢にも表れていた。もし私が支援する立場だったら、避難している人々を「かわいそう」という目で見てしまいそうだが、カンボジア赤十字社の人々は自信を持ち、笑顔で支援を行っていた。カンボジア赤十字社の人と避難民とのコミュニケーションを見ていても、彼らの言葉によって相手が笑顔になっていく様子が印象的だった。避難している人々の感謝の笑顔が支援者の笑顔を生み、その笑顔がさらに温かな雰囲気をつくり出しているのだと感じた。

避難所という厳しい環境の中でも、カンボジアの人々は感謝を軸に人と人がつながることで、笑顔の輪が広がっていました。避難所以外の空間でもカンボジアの方は非常にフレンドリーで、笑顔で話しかけてくださる。温かい笑顔と、素直に感謝を伝えることのできる生き方が、助け合いの現場に well-being を生み出しているとわかった。私はその生き方やコミュニティに深い感動と尊敬を感じた。



カンボジアの人々の優しさと平和の尊さ（高畠 仁）

私はこのカンボジアでの研修を通して、「自分の視野を広げる」という目標に対し、大きな意味を持つ経験になったと感じている。私にとって初の海外渡航であったが、事前研修のときから一緒に活動してきた仲間やスタッフの方々が大きな支えとなった。

カンボジアでは多くの貴重な体験をさせてもらった。トンレサップ湖の日本では見られない水上集落や、児童たちの熱心に歌う姿に思わず涙が流れたワットボーカ



学校の訪問など現地の人との交流をとおしてカンボジアの文化、ニュースやインターネット上の情報だけではわからなかった生活の実情を知ることができた。ホームステイでは日本とは大きく違う生活スタイルに最初はかなり驚いた。虫や鶏、犬の鳴き声が大きく聞こえる中寝たこと、ユースと一緒にのんびり話したこと、英語があまり通じない家族に「オーケン（カンボジアの公用語でありがとうという意味）」と言って笑ってこたえてくれたこと、スペイシーでおいしかったご飯。カルチャーショックを感じることもあったけど、ホストファミリーのおもてなしととても心に残っている。

カンボジアでの活動の中で特に印象に残っているものは国境情勢の影響で避難している人々が集まるパゴダ（寺院）とトゥールスレン博物館の訪問だ。

カンボジアでは国境付近で軍事衝突が起きているという認識でとどまっていたが、国の中心にも影響が起きていることがはっきりとわかった。パゴダには小さな子供を連れた人、車いすを使っている人もいた。物資の配給を求めて集まつた人々の中にはすごく疲れ切ったような人々もいて避難先での過酷な生活を感じた。避難民に直接話を聞くこともでき、小さな子供を連れた母親に避難所で一番困っていることを尋ねたところ、子育てのための物資が足りていないということであった。非常に困った生活状況でも最後には笑顔で挨拶をしてくれて現地の人々の優しさを感じた。トゥールスレン博物館で見たものは過去の出来事を生々しく伝えていた。無実の人々が意味のわからないことを突きつけて拷問し、人を人として扱わないような当時の出来事に対して悲しみと同時に怒りを覚えた。このカンボジアでの出来事を後世に伝えてほしい、同じことが起きないでほしいというメッセージは広島の原爆投下に対する思いと共通していた。この二つの場所の訪問によって平和の尊さを改めて感じ、今起きている軍事衝突は他人事ではないと感じた。学校に行けること、帰る家がちゃんとあって十分な食料があることが当たり前ではないとわかり、課題意識が渡航前よりも強くなった。世界で起きている衝突に対する解決策が今すぐ思いつくことができるわけではないが、今後平和について考える材料になり、パゴダで見た大変な状況で生活している人々を救わなければいけないという新たなモチベーションになると確信している。今回の研修で得た経験、考え方、気づきを多くの人に伝えていきたいと思う。

最後に、このような貴重な体験をさせてくれた両国の赤十字社の皆様やこれまでの事前研修でお世話になった方々、ありがとうございました。

私が改めて考えさせられたこと（園田 佳奈）

私がこのスタディーツアーで一番感銘を受けたのは、現地の子供達の意識の高さだ。カンボジアの学生と私たち日本の学生はすべての物事において学ぶ意欲に明確な違いを感じた。実際に現地を訪問する前は発展途上国と言われているカンボジアで私たちは何をしてあげられるかなと考えていた。しかし、実際は私がCRCユースと1週間共に過ごして多くのことを教えてもらった。私のバディーの子はどこの施設を訪れるにも私に英語でわかりやすく説明してくれた。CRCユースはカンボジアについてどんな質問にもわかりやすく答えてくれた。自国についての知識量がとても多いと感じた。また、私のバディーの子は毎朝5時から英語のプレスクールにいつて9時から学校に通っていると言っていた。現地の高校を訪れた際、この学校の過半数の生徒がCRCユースとして自主的に活動していると聞いた。そして、日本みたいに保健室の先生がいるわけではない。CRCユースとして活躍している生徒が怪我の手当てをし、警察官と共に交通整備を行っていた。救命方法を全員が学び実践することのできる状態であった。ホームステイでは夜みんなで集まってノム-ポン-アンというお米を炒ることで作ることのできる日本でいうポン菓子のようなお菓子を作ってくれた。このように、現地の学生は限られた環境の中で何事にも学習意欲が高く自ら学ぶチャンスを掴みにしている。

しかし、私たち日本の学生は少なくとも中学生から英語の勉強をするはずなのに流暢に話せる人が少ない、自主的に課外活動している学生は少ない、救命法を積極的に学ぶ学生が少ない、自国の文化、政治、歴史を十分に学んでいなく他国の人々に伝えることができないと言われている。

カンボジアは、インターネットの普及も完璧ではないし1人1台タブレットを持っているわけでもない、学習環境が十分に整っているとは言えない。しかし、カンボジアの学生全員が学びのチャンスを最大限に活かし吸収している。そして人の死は身近に存在することをしっかりとわかっている。

それに比べて、日本の学生は何不自由ない学習環境や生活環境に甘えてしまうことにより、せっかくの学習チャンスを台無しにしてしまっている。学習意欲のある学生もどんどん少なくなっている。こんなに素敵な環境があるのにも関わらずこの環境を当たり前だと思って学ぼうといい。

このようにカンボジアの学生は日本の学生に比べて学習意欲が高く多くの知識を持っている。私は「今私たちに与えられている生活環境や学習環境は当たり前ではなく学習意欲をもつと高め甘えるのではなくもっと活かしていくかなければいけない、このままでは日本は活力を失ってしまう可能性がある」とカンボジアの滞在を通して改めて感じた。これこそが、次世代の日本を担う私たちが大前提として意識しなければいけないことだと思う。そして、私自身が意識を変え周りの人と一緒に意識を高



めていかなければならない。このように、実際に私たち日本の若者の意識を変えて行動に移し初めて他国に目を向けられるのだと思う。

私がカンボジア研修で学んだこと（平野 花歩）

私は、今回のカンボジア研修を通して多くのことを学んだ。特に印象に残っていることは、ワットボーカ学校への訪問である。渡航前までは、「小学生たちは元気な子たちが多いイメージだったため小学校訪問の際、話を聞かなかったりして私たちが行う予定の交流内容を円滑に行うことができるのだろうか。」と不安に思っていた。しかし、実際に訪れてみるとワットボーカ学校ではカンボジアで最も規律のある小学校で校内もものすごくきれいであった。また、日本の小学校と比較してみてもかなり驚くことの多い印象である。私は、日本の学校は世界で一番規則が厳しいものなのではと渡航前までは感じていたが、ワットボーカ学校は日本と比較しても驚くほどの細やかなルールが多々あり驚いた。

他にも今回のカンボジア研修で、カンボジアのユースとのたくさんの交流を通してバディの子がとても親切にしてくださりとても嬉しかった。アンコール国立博物館などでは、展示物の説明をしてくれたり、体調が悪い時にはいろんなことを気にかけてくれたりするなど様々なことをサポートしていただき、安心してスタディーツアーを行うことができた。このカンボジア研修を通して、すごく仲が深まったと感じる。そして、ホームステイでは一緒にカンボジアで有名な料理を作ったり、家の周辺を散歩したりするなど、現地の暮らしや文化についても深く学べる体験が数多くできた。私は、クメール語が話せなかつたのでホストファミリーの人と会話をするのが大変だったが、その時はユースの子たちが英語で毎回、話の内容を訳してくれたりするなどお話することができた。ホームステイの期間がもう少し長ければ家族とももっと仲を深めることができたのかと感じた。

このことから私はカンボジア研修を通して、カンボジアでもらった多くの優しさや親切心にとても感銘を受け、またカンボジアに訪れたいと思った。想像していたよりも多くの人に様々なことを助けて頂き、すごく実りのある研修を行うことができた。この経験を今後に活かし、将来さまざまな場面で役立てていきたいと感じた。



幸せと暮らし（大森 悠生）

今回の渡航で私は多くの学びと広い視野を手に入れることができた。そして、カンボジアの人々との会話や生活の中で、多様な「幸せの在り方」と同時に「失われつつある日常の幸せ」を知った。この所感では、私が現地での7日間、そしてカンボジアの人々との会話の中で見聞きし感じたことを綴る。

私が最初に現地の人々の優しさと幸せを実感したのはホームステイでの2日間だ。慣れない環境でも安心して過ごせるように、ホストファミリーの方々やカンボジア赤十字社の皆さんがあなたの笑顔と心のこもった食事で出迎えてくださり、夜には暑さを和らげるため扇風機まで用意してくださった。私が宿泊したホームステイ先は二年前に電気が通ったばかりで、設備も少なく、資源なども十分ではないはずだ。しかし、私たちの滞在が笑顔で溢れるものになるよう、現地の方々からは文化体験や調理、食卓での会話を通して多くのおもてなしをいただいた。そんな方々のお心遣いのおかげで、私の顔からは自然と笑みがこぼれ、家族や友人、地域との関わりを大切にするカンボジアの方々から沢山の幸せを分けてもらった。

しかし、そうした幸せに満ちた日常の中にも隣国との戦争が落とす影は確かに存在していた。それはホームステイ1日目の夜の事である。夕食後、私はホームステイ先に家族で遊びに来ていたマナという10歳の少年と椅子に座り、ユース達の Ambok 作り^{*1}を見ながら会話を楽しんでいた。彼にとってシェムリアップの田舎での生活はとても幸せで、水や住居の問題、生活の厳しさはあれど、家族や友人と日々を楽しく過ごせているからどんな事があっても乗り切れるそうだ。彼の語るそんな幸せは、私がホームステイで感じたものと重なるものであった。しかしその後、彼はタイによる爆撃によって、その幸せが多く奪われている現実を語り始めた。私は会話を続ける中で、たった10歳の彼が人々がお互いを憎みあう戦争の存在を知ってしまっていることに気が付いた。タイへの差別的な戦争用語、避難民や家族を失い苦しむ人々の姿がSNSなどを通して彼の目に映ったのであろう。私は、タイが嫌いだと語るマナの姿に動搖を覚えた。10歳という年齢は、人々が悪い苦しむ戦争の負の面を知るにはあまりにも幼いと感じた。先ほどまで友達と自転車で遊び駆け回る幸せな生活を語っていた小さな彼が、一転して明確な「大きな敵」について語り始める姿は衝撃的だった。

私が、「幸せな日常を脅かす戦争」に触れたのはこの日だけではない。今回、私達はパゴダを使った避難所に伺う機会があった。そこには爆撃によって本来の家を離れる事を余儀なくされ身を寄せる多くの人々の姿があった。

帰国後も、私は戦争の影響を多く目にした。広島に到着した後、私はユースフォーラムで出会った大学生の方、そしてカンボジア赤十字社の多くの人々とSNSを通じて多くの会話をした。その中には、私達の帰国2日後に実家近くの集落にクラスター爆弾が投下された人、故郷が爆撃に遭い、遠く離れた地に住む家族を心配する人、友人が兵士として前線に送り込まれ不



安で眠れなくなっている人など、私のスマホの画面には数日前まで見ていた幸せな日常とは一変した日々を送る友人達との会話が広がっていた。これは重大な国際人道法違反だ。しかしそのような現実を目の前にしても、ただ停戦を祈ることしか出来ない自分の無力さを強く感じた。

2025年12月27日、現地時刻12時にタイとカンボジア間に停戦協定が結ばれた。これは一時的なものであり、持続的な効力は限られるが、少なくとも2日間は新たな被害が生まれないことに私は安堵した。

最後に、渡航7日目のユースフォーラムで出会った大学生からもらった言葉がある。“When life hurts SiemRiep heals”、心が傷付いたらシェムリアップが癒してくれる、という意味の言葉だ。この格言が表す通り、私が知り合ったカンボジアの、そしてシェムリアップの赤十字の人々はどなたも慈愛と親しみの心に満ちた素敵の人々であった。人々には常に笑顔で接し、無条件の幸せを分けてくれる。私はカンボジアに来て、本当に貴重で掛け替えのない体験をすることが出来た。カンボジア赤十字、そして日本赤十字社広島県支部の方々に感謝するとともに、この感情を忘れず、来年からの受け入れ、そしてそれ以降のプログラムにも深く関わっていきたいと思う。

これまでの約半年間、そして8日間本当にありがとうございました。来年度からもよろしくお願い致します。

*¹ 炒った米を叩き潰して作られるカンボジアの伝統的なお菓子のこと。

「笑顔がつないだ二日間と、その先に見えたもの」（王野 朝陽）

カンボジア研修の様々な経験の中で僕が最も心に残っているのは、カンボジアの人々の「笑顔」である。「笑顔」が人との距離を縮め、時には困難さえも乗り越えさせる力を持っていることを知った。

最初に「笑顔の力」に出会ったのは、二日間のホームステイであった。初めてステイ先の家を目にした瞬間、僕は驚きのあまり、思わず日本人スタッフの方の顔を見てしまった。それほど、日本の生活とは大きく異なる環境だったからだ。さらにバディに「外で寝る？ それとも中？」と何気なく聞かれた時は、言葉を失い、時間が止まったようにも感じた。たった2泊にも関わらず、この環境の中で過ごせるのだろうかと心が落ち着かず、「早く日本に帰りたい」と思ってしまったこともあった。目の前の事実を素直に受け止めきれず、気持ちが追いついていなかったのだと思う。しかし、そんな僕が乗り越えることができた理由、それがカンボジアのユースたちが見せてくれた、心からの「笑顔」だった。彼らは、僕が少しでも楽しめるようにと常に気にかけ、精一杯のおもてなしをしてくれた。一緒に料理をし、音楽を流しながら洋楽を歌った時間は、言葉の壁を越えて心が通じ合った瞬間だった。日本とは異なる環境の中でも、彼らの笑顔を見るたびに不安が和らぎ、次第に「ここにいても大丈夫だ」と思えるようになっていった。笑顔には、人の心を安心させ、前向きな気持ちにさせる力があるのだと知った。

そしてもう一つ、忘れられない活動がある。それは避難所を訪問した時のことだ。僕はこれまでニュースや映像でしか見たことのなかった「軍事衝突による現実」を、初めて自分の目で見た。避難民の中には、妊婦の方や障害を持つ方もおり、厳しい状況の中で生活している様子が伝わってきた。私たち日本人も、実際に食事を提供する活動に参加したが、避難民の方々にどのような言葉をかければよいのか分からず、複雑な気持ちであった。しかし、そんな僕の想いとは真逆に、避難民の方々は皆んな笑顔で私たちを迎えてくれた。その笑顔は、決して状況が楽だから生まれたものではないはずだ。それでも、人と人が出会ったとき、感謝や思いやりを笑顔で表そうとする姿に強い衝撃を受けた。同時に、自分は普段どれだけ余裕がある状況でも、簡単に不満を口にしたり、笑顔を忘れたりしていたのではないかと、考えさせられた。

カンボジア赤十字社ユースの皆さん、ホームステイ先、避難所、研修の先々で出会ったカンボジアの人々の笑顔は、単なる表情ではない。相手を思いやる気持ちを示しており、人を支え、人と人をつなぐ架け橋のように感じる。これから先、赤十字のプロジェクトに参加させてもらう時、困難な状況に直面した時、誰かと分かれ合えないと感じた時、カンボジアで教えてもらった笑顔を思い出したい。そして今度は自分が、誰かに笑顔を届けられる人となり、日本と世界とを繋ぐ活動をしたいと思う。



カンボジアと水 -現地での経験を通して- (石井 みわ)

今回の研修で最も印象に残ったのは、カンボジアの水である。

カンボジア王国には多くの水源がある。大きなものとしてはメコン川、バサック川、トンレサップ湖などが挙げられ、道を歩いているだけでも湿地が目に入った。

そのため研修中、さまざまな場所で水を多面的に捉える機会を得た。ここでは特に印象に残った三つの場面を取り上げ、私の所感を述べたい。



一つ目はアンコール博物館である。ここでは宗教的な意味をもつ水に触れた。アンコール朝時代、ヒンドゥー教が主流であった頃の展示を見ている中で、王寺院の中央祠堂にあるリンガとヨニから生じる聖水を、王が最初に飲む儀式が行われていたことを知った。これは「宇宙的エネルギーである聖水を、神と人をつなぐ存在である王が最初に受け取る」というヒンドゥー的王権思想に基づくものである。その後、仏教が主流となってからも、水は、生命や徳を象徴する神聖な存在であり続けた。この学びを通して、水祭りや注水儀礼といった現在も続く水文化と頭の中でつながり、非常に印象深かった。

二つ目はホームステイ先である。ここでは限りある資源としての水を見た。煮沸には時間がかかり、購入した水には費用がかかるため、清潔な水は常に十分にあるものではない。足りない分は、井戸水や雨水で補われていた。そのため生活の中では、用途によって求められる水の安全性が違った。風呂は体を温める場所ではなく、汗を流したり体を冷やしたりするためのものであり、井戸水などを繰り返し使うことで補われている。トイレも同様である。皿を洗う水には、コスト面で優れた雨水が使われることが多く、乾燥や日光によって一定の安全性が確保される。一方、飲み水は直接体内に入るため、最も高い衛生管理が求められ、時間や費用をかけて煮沸した水や購入した水が用いられていた。それらを見て、人々が工夫を重ねながら環境に適応していることに感銘を受けた。

三つ目はトンレサップ湖である。ここでは厳しい現実としての水を見た。湖の水は水上村の人々の生活に文字通り直結しており、漁業による生計だけでなく、生活用水としても欠かせない存在である。しかし、メコン川上流のダム建設や気候変動の影響により漁業は不安定になっている。さらに、浄水器は費用面などから頻繁に利用することが難しく、生活用水の衛生面には依然として課題が残っている。美しい水上村の風景の裏には、視覚だけでは見えない問題が存在しており、「気づきについて考え、実際の行動へつなげていく」ことの重要性を強く心に刻んだ。

異文化と社会環境の交差点で（小山 陸）

「チョムリアップ・スオ！」——4千キロの疲れは赤十字メンバーの熱帯仕立ての温かな笑顔とおもてなしで溶けた。私は近頃、公衆衛生、地政学、メディア、気候変動など多分野に関心があった。一方、自分は“何が知りたくて、何をしたいのか”その核を追い続けていた。あの歓迎は、人との出会いを通じて構造化された理解を作る、最初の節目であった。



その後、私たちはカンボジアの光と影を駆け抜けた。アンコール王朝の歴史に触れ、東南アジアの洗礼を体で受け止め、水上村の風を浴びる。訪問先の現地の学校で子供たちの歌声に地球の力を感じ、ホロコーストの歴史に胸を締め付けられる。こうした濃密な時間の連続であった。

さてみなさん、この旅にて宿舎以外に私たちが最も長く滞在した所はどこでしょう？それはバスである。空港を出て数分、圧倒的な平野を一本の道が切り裂き、疾走する車窓から見えたのは、私の固定観念を静かに揺るがす光景であった。それは湿地特有の植生ではなく、雄大な空でもない。そこに暮らす人々の、ありのままの生活であった。河川敷に転がるのはヤシの実やバナナの皮だけではなく、プラゴミや粗大ゴミまでもが散在していた。すぐ隣では同年頃の若

者が、火を起こして何かを焼いてた。現地の聞き取りによれば、平日にもユース世代の家事や労働がまばらに見られ、とりわけ近年は厳しい自然環境に重なって地球温暖化による農産物被害が出ており、生活にも支障が出ているようである。他方で対話を通じて、やはりメディアの影響は強く、国内ではタイとの対立について「長期的宗教対立から発展した」というより、「相手側の先制攻撃に対する防衛」という見方が強いと感じた。宗教的対立は領土問題に発展し、結果としてナショナリズムの下、国民の生活が圧迫され、感情が膨らむ構造を捉えた。教科書の文字でしか知らなかった『途上国』や『児童労働』、『紛争』といったラベルが、目の前の光景と重なった瞬間、世界は急に立体感を帯びてくるようである。多様な課題が複層的に関係しているため、本質を見失いそうになる場面を私自身は体験した。ただこの迷いは身を異文化に投げたからこそ感じることができた財産である。

さらに私が学んだのはカンボジアの社会だけではない。印象深く残っているのは、人や景色に見える国としての豊かさだ。19世紀後半からの急速な近代化の中で、文化的アイデンティティを失いながら画一的な発展を遂げる国が多い中、カンボジアではそれを感じなかった。各都市にて、遺跡の保存、目上の方（王室や社会的規範）へのリスペクト、ハンドメイド製品市場の維持などに始まる独自性を強く感じた。さらには、難民キャンプにて赤十字社の人道支援活動の一端を見学したり、ODA援助で学校文化を確立した学校と交流を深めたりする中で、学ぶことに意欲的な生徒たちの姿勢や、「誰一人取り残さない」赤十字の最前線での温かさを再認識した。

一貫して、社会課題と文化価値は対立するものとしてではなく、共存するものである。広島もまた、焦土の中から復興を遂げ、平和への願いを文化として育んできた街である。さて、この経験をもとに私は学びに戻り、目の前の問いを探究し続ける。広島とカンボジアに灯る赤十字の火を、絶やすことのない大きな協働の輪へと広げていきたい。人との出会いの中に答えを探す。その決意こそが、私が追い求めていた『核』なのだと確信している。今後も強固なパートナーシップを多方向に築き、地球市民として未来を共創していきたい。

本当の平和について（齋藤 凜）

私は、今回のカンボジア研修を通して平和への意識に変化があった。

カンボジアはクメール・ルージュによって多くの罪なき人々が虐殺された過去を抱えていることは既知の事実として世界中で知られている。しかし私はこの事業に参加する前まではこの残酷な過去を知らなかった。インターネット等を通じ様々な記事に目を通してきたが詳しく説明されているものがなかなか見つからず、よくわからないままカンボジアへ渡航した。

そして現地のユースのお話やトゥールスレン博物館へ足を運ぶことでその地で何が起きたのかようやく理解することができた。

特にトゥールスレン博物館は私の中で最も衝撃的な場所であった。

私は日頃から平和学習について非常に興味をもって接していたため、この事実に大きな衝撃を受けたとともに、「なぜこのようなことがおきたのか」「どうすれば二度とこのようなことが起きずに済むのか」という問い合わせ溢れ出てきた。

そして行き過ぎた思想は人々を惨たらしい結末へと導くのだと知ることができた。もちろん簡単に結論づけることはできないが、ポル・ポト政権が行き過ぎた共産主義の思想を持ち、それを人々に強制し、違う思想である人を虐殺したことがこの結果を生み出したのだろうと思う。

正直に述べると、私は今まで原子爆弾と戦争のつながりやその残虐性ばかりに目が行き、ほかの国の戦争や内戦の残虐性を見過ごしてきたように感じる。

まるで世界の戦争による傷は第二次世界大戦で終結したかのような錯覚に飲まれていたのだと思う。しかし実際のところは様々なところで紛争は絶えず、命の搾取が日々行われている。もちろんそれを知らない訳がなかった。しかし、それは事実として知っているだけでありどこか他人事であった。

私はこの事業を通して、カンボジアの残虐な過去を学んだり、リアルタイムで起こっていた軍事衝突の被害を知ったりすることで、私はいかに世界の状況を本当の意味で理解せずにいたのかを知ることができた。私は日本という安全圏で、世界で勃発する紛争を他人事のように捉え、目の前にしかない平和へ微笑んで「平和ごっこ」をしていたように思う。きっとこの渡航がなければこのことに気づけず、「平和へ関心があるだけの生徒」になっていたに違いない。今では、「平和へ関心を持って自らその事実を知ろうとし、実際に行動する人」を目指すようになった。



このような機会を設けてくださった日本赤十字社様には深い感謝を申し上げます。また、この活動を通して出てきた「問い合わせ」を自分の中で消化できるよう、勉学と平和的活動に挑んできたと思う。

誰一人取り残さない世界を目指して —カンボジア渡航での気づきから— (知久 遥)

今回のカンボジア渡航を通して、講義や文献で学んできた国際支援や看護の知識が、現地の人々の生活の中でどのように実践されているのかを具体的に知ることができた。本渡航は、国際支援を知識として理解する段階から、現実の中で考える段階へと、自身の視点を大きく変える経験となった。

プログラムでは、この度の軍事衝突により生活支援が必要となった市民のためのシェルターを訪問した。先の見えない不安や、当たり前の生活が突然奪われることの悲しみを想像しても、

実際にはその何倍もの苦しみを抱えているのではないかと感じた。避難民の手を握り、流れる涙を見つめることしかできず、自分の無力さを痛感した経験は強く心に残っている。

渡航中、特に印象に残ったのは、こうした状況下に加え、水上や、動植物・高温といった特徴的な環境の中で、人々が日常生活を営み、支え合いながら暮らしている姿である。医療や生活支援の現場では、十分とは言えない設備や物資の中でも、現地スタッフや支援団体が工夫を重ねながら人々の健康と生活を守っていた。最低限の生活環境を確保することの難しさと同時に、それでも人としての尊厳を守ろうとする姿勢の重要性を強く感じた。

また、生活習慣や価値観の違いによるカルチャーショックも多く経験した。衛生環境や住居、医療へのアクセスなど、日本では当たり前だと感じていた安全や保障が、決して普遍的なものではないことを実感した。一方で、地域や家族との結びつきが強く、困難な状況においても互いに支え合う文化が根付いていることが印象的であった。特にカンボジア赤十字社の活動からは、地域住民との強い信頼関係と、住民同士の横のつながりを基盤とした支援の重要性を学んだ。支援は一方的に提供されるものではなく、地域の中にある関係性を活かすことで、必要な人を取り残さずに届けられるのだと感じた。誰一人取り残さない支援を実現するためには、制度や物資だけでなく、人ととのつながりを支える視点が不可欠であると考える。



今回の経験を通して、看護師を目指す者としての自身の価値観にも変化が生まれた。医療行為だけでなく、生活や社会背景を含めて人を捉え、誰もが尊厳を保った生活を送れるよう支援したいという思いがより明確になった。今後は、日本での学びを深めるとともに、国や文化の違いを越えて人と人をつなぐ架け橋となるよう、行動していきたい。

当たり前が当たり前では無い環境の中で感じたカンボジアの人々の温かさとつながり（菅 彩華）

今回のカンボジア滞在を通して、最も強く感じたのは当たり前の違いとカンボジアの人々の国民性である。これまで訪れてきた国ではホテル滞在が中心であり、ローカルな家庭で生活するホームステイは数少ない経験だった。水の出どころが分からぬシャワーヘッドすらないお風呂や、夜明け前から鳴くニワトリの声など、日本で想像していなかった生活環境に最初は戸惑いもあったが、それがカンボジアの人々にとっては当たり前の日常であることを実感した。実際に同じ家に滞在していたカンボジア赤十字社のユースに、日本の家には動物がいないこと、夜も動物の鳴き声がほとんど聞こえない



いことを伝えると、とても驚いた様子を見せていました。その反応を見て、私にとっては特別に感じるこの生活環境が、彼女にとってはごく自然で当たり前のものなのだと強く実感した。この経験を通して、自分の中の「当たり前」は決して世界共通ではないのだと気づかされた。そのような環境の中でも、ホストファミリーはとても優しく、果物を分けてくれたり、食事を最初に勧めてくれたりと、言葉が十分に通じなくても行動や表情を通して多くの愛情を注いでくれた。ポル・ポト政権というつらい歴史を経験し、今なお発展途上にある国でありながら、外から来た人を家族のように受け入れ、感謝の気持ちを言葉で伝える姿勢に、カンボジアの人々の他者への深い思いやりを感じた。また、元々予定にはなかった避難所訪問も非常に印象に残っている。情勢が混乱する時期に渡航したからこそ実現したこの訪問では、難民の人々の生活や紛争の現実を身近に感じることができた。避難所はお寺に開設されており、人・物・お金が寄付によって集まりやすい場所であることや、日頃から困窮した人々が支援を求めてお寺に集まる文化が背景にあることを知った。国として公的な避難所を整備することが難しい状況の中で、お寺を拠点に人々が協力し合い、支え合っている姿から、人のつながりと助け合いの精神を感じた。一方で、避難所で出会った人々の多くは紛争とは無関係でありながら、突然生活を奪われ、不安の中で十分とは言えない物資や衛生環境で暮らしていた。家が爆発によって跡形もなくなったという話を聞き、生きていること自体が決して当たり前ではないのだと痛感した。それでも、限られた環境の中で懸命に生きようとする人々の姿や、1ドルでも寄付を続けるというユースの言葉に触れ、将来このような立場にある人々に寄り添い、行動できる大人になりたいと強く思った。今回の経験は、平和や国際協力について考える大きなきっかけとなった。

4 帰国報告会

本事業の成果を広く共有することを目的として、2026年2月11日、日本赤十字社広島県支部において帰国報告会を開催した。会場及びオンライン併用により実施し、保護者や関係者等約30名が参加した。

学生からの報告では、カンボジアでの滞在を通じて感じた平和への思いや異文化理解の重要性について発表を行った。ポル・ポト政権時の大虐殺を伝える博物館を見学した経験からは、「未来を奪われた無実の人たちの悔しさが伝わり、広島と共通するものを感じた」との感想が述べられた。また、タイとの軍事衝突の影響により国境地帯から避難してきた人々との交流についても報告があり、過酷な状況下にあっても笑顔を見せる姿に触れ、「物理的な支援だけでなく、思いやりなど心の支えが重要である」との学びを発信した。

本報告会は、学生が自らの言葉で学びや気づきを発信するとともに、参加者に対して本事業の意義を共有する機会となった。



5 全体の振り返りと成果、今後への展望

国際情勢の影響により、当初予定していた8月の渡航は延期となったものの、本事業は関係各所の理解と協力のもと実施され、参加者全員が大きな事故や健康上の問題なく、無事に広島へ帰着した。

広島出発時には、海外渡航や異文化環境を前に緊張した様子も見られた学生たちであったが、カンボジア赤十字社及び同ユースによる温かい歓迎を受け、現地での交流や各種プログラムを通じて、次第に緊張が和らぎ、主体的に行動する姿が見られるようになった。

特に、初日のホームステイを終えた翌朝には、学生たちの表情や行動に大きな変化が見られた。日本とは異なる生活様式の中で、ホストファミリーやカンボジア赤十字社ユースと寝食を共にする経験を通じて、言語や文化の違いを越えた相互理解を深める機会となった。

また、軍事衝突の影響により避難民の方々が身を寄せているパゴダを訪問し、実際に人道支援を必要としている人々と向き合い、対話をすることは、世界情勢に目を向ける重要性や平和について考える貴重な学びの機会となった。

本事業を通じて、参加した学生は赤十字ユースとして、また将来国際社会で活躍する担い手として求められる役割や姿勢、価値観について理解を深め、国内外の社会課題や人道支援に対する関心を高めた。現地ユースとの協働や対話を重ねる中で、自ら考え主体的に行動する姿勢が育まれたと感じる。

さらに、本事業は単なる海外訪問にとどまるものではなく、スタディーツアーとしての学びに加え、5か年にわたる相互交流事業における継続的な関係構築の第一歩として、重要な意義を有するものであった。参加した学生たちは、2026年4月に予定されているカンボジア赤十字社の広島訪問に向けて再会を心待ちにしており、交流の継続性という観点からも、今後の発展につながる重要な基盤が築かれた。

今後に向けては、今回渡航した学生が中心となり、カンボジア赤十字社との交流を継続するとともに、広島県内の高校生や大学生など新たなメンバーを巻き込みながら、渡航に限らない継続的な取組へと発展させていくことが求められる。広島県支部としても、ユースと連携しながら、将来を見据えた交流の深化に取り組んでいく。

本事業で築かれた信頼関係と学びを礎に、今後も5か年にわたる相互交流事業を着実に推進し、次世代を担うユースの育成と国際的な人道活動の発展に寄与していく。

最後に、本事業の実施にあたり、多方面から多大なるご理解とご協力をいただきました皆様に、心より感謝申し上げる。

6 その他

ユース相互交流事業の様子



カンボジア赤十字社作成動画



広島県支部作成動画

日本赤十字社広島県支部 HP

